

中川米造先生 七十一歳の死

日本医史学会理事 長門谷 洋 治



故 中 川 米 造 先 生

中川米造先生はわが国唯一人の医学概論学者であった。先生によれば医学概論(先生はこれを英語で Medical Humanity と表現した)は①医学哲学 ②医療社会学 ③医学史の三より構成されるとした。先生の医史学方面の出版としては丸山博氏との共編『日本科学技術史大系 医学』二冊(第一法規 一九六七・六八)が知られるが、むしろ医学史の見地から書かれた一般書『医学を見る眼』(日本放送協会 一九七〇)などの方がなじみやすい。本学会で発表されたこともあったが「学会発表では新しい知見・見解が必要だが、医史学でこれを盛りこむのは容易でない」とマルチな先生にしては慎重であった。本学会の評議員でもあったが、一九九七年には自らこれを辞されている。一方、丸山博氏が創始された医学

史研究会には当初より全面的にサポートされ、九八年、丸山氏死去のあとには代表幹事となられた。先生の関心・行動範囲は広く、医療関係者のみならず一般市民の中にも積極的にはいりこみ対等の立場で話された。気軽に外国に出向き、ときにはアフリカや往時のパキスタンなどに行かれ、アフリカでは魔法医に接触し、これより医療の原点的なものに思いをめぐらされた。また「癒し」という言葉を使われたので小生は「牧師の説教題みたいでんなア」とひやかしたが、最近では医療界でもこの言葉がかなり使われるようになってきた。

先生が阪大に就任されたときは講師で、小さな一室があるだけだった。教授になられても不完全講座で、秘書の一人さえいなかった。研究室は転々と場所が変わった。先生は正規講座への順番は三番目だと仰言っていたが、いつもあとからの新設臨床講座が追い抜いていった。しかし先生はひとことの不満も洩らされなかった。先生の研究室には老若男女、いろいろな人が出入りし賑やかであった。脳死・臓器移植などには明瞭な考えをもっておられたが、相手の意見をきき、徹底的に追いつめたり、極論に走られることはなかった。医学教育学会副会長、ひかり協会（森永砒素ミルクの被害者の会）役員などの要職を長くつとめられた。独特の技術で人々を魅了された。まさかと思う癌が先生を襲ったが、先生は自らの病気を公表し、落着いてこれに対処され、自ら納得する形で生を終えられた。七十一歳であった。

（大阪府豊中市）